

文語日誌(平成二十五年十二月七日)

一 京王百貨店古書市より

① 「倫理御進講草案」杉浦重剛(第一書房、昭和十六年刊)

杉浦重剛(一八五五年生、一九二四年没)は、大學南校に學び、英國に六年間留學す。東大豫備門校長、ジャーナリスト等として活躍す。本書は、大正三年より九年にかけ當時の皇太子(のちの昭和天皇)に御進講の草稿なり。話題は三種の神器など帝王學の基本事項なれど、コロンブス、ルソーへの言及などその視野は頗る廣し。本書の一部は抄として近代デジタルライブラリーにて読むこと可能なり。

<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1033978>

② 大日本女學會「婦人寶典」卷の五 作文(吉川弘文館、明治時代)

婦人が文語を書く際の参考書として適當なり。當時良家の子女の嫁奩かれむ(嫁入道具を納れる筐)の中にあたりたりと覺ゆ。

③ 「書の友 増刊號 皇紀二千六百年記念 幕末維新遺墨新講」(雄山閣、昭和十五年刊)

徳富蘇峰の卷頭言に始まり、藤田東湖、木戸、大久保、西郷、三條らの書の數々、寫眞附きにて解説せらる。

二 東横百貨店古書市より

④ 「穗積歌子」蘆谷蘆村著(禾惠會、昭和九年刊)

澁澤榮一の長女、穗積歌子(一八六三年生、一九三二年没)の評傳なり。穗積陳重と結婚し、重遠は息子に當たる。見合ひの席上、歌子の愛讀書の「日本政記」(頼山陽著)なることを陳重より言及せらるるほどの才媛。夫穗積陳重の著作は悉く讀み盡くしたりといふも滅多に無き話。本書には歌子本人の文章も數多引用しあり。たとへばグラント將軍を飛鳥山の澁澤邸に招きたる際の様子など細かく活寫す。

⑤ 「杉浦重剛座談録」(岩波文庫、リクエスト復刊、絶版)

初版は一九四一年。御進講當時の状況も偲ばる。内容はとりとめなき雑談が中心なれど、ロンドン留學中に、友人穗積陳重、河上謹一と三人にて、日本歴史上好みの人物をばそれぞれ紙に書いて見せ合ひたる段、特に興味深し。政治家は、穗積の菅原道眞、河上の大江廣元、杉浦の三善清行と意見分るるも、婦人は靜、歌人は西行と一致せりとなむ。

⑥ 明治天皇 御聖蹟大觀(文學協會篇、大正元年刊)

ネットの「日本の古本屋」にも無き稀覯本。千ページを超え、浩瀚にしてずしりと重し。諒闇記(大正天皇御親録)、明治天皇一代記、明治時代史、明治の詔敕、御製、功臣録等、全てルビ付きなるは嬉し。たとへば、「鹵簿」ろぼ。儀仗を具へたる行幸の列の意味。

目 三省堂古書部

⑦ 「頼山陽とその時代」中村眞一郎著（中公文庫、一九七六年刊。單行本初版は一九七一年）

永く探し求めあたる文庫本、三省堂四階の古書フロアにて発見す。比較的狀態の良きものなれば、三冊揃ひを四千圓にて購入す。頼山陽は若き頃より奇行を繰り返し座敷牢にも三年居りたるを、著者自身も患ひたる神経症より推してその影響を見、親近感を覺えたりと記す。又著者曰く、神経症には、古の人の分厚く坦々たる傳記を讀むが一番の癒しなりと。本書にては、江戸時代に頼山陽と何らかの關はりのありし儒者たちの作品、綿々と紹介しあり。端々に佛蘭西文學との比較話なども披瀝するは微笑まし。長距離通勤の車中の讀書に向く。

ㄣ 田園調布の古書肆りぶらりあ

⑧ 「野口英世の手紙」宮瀬睦夫著（愛亞書房、昭和十八年刊）

最近注目されぬ野口英世なれど、初期の候文の手紙流石に趣きあり。

⑨ 「乃木院長記念録」（學習院輔仁會、大正五年刊）

乃木將軍の主要論文なども含む。寫眞等資料價值高し。

△ 神保町

⑩ 「新譯 先哲叢談」大町桂月評（至誠堂、明治四十四年刊）

叢文閣にて購入。千圓也。學生文庫の第十三編。近世儒學を知る最良の書といはるる「先哲叢談」（元は漢文）をば桂月先生が照應せらる。内容は、惺窩、羅山等有名儒者の列傳なり。